

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2012

課題番号：20390542

研究課題名（和文）在宅療養中の疼痛患者の現状調査と痛みの評価、及び疼痛ケアネットワークの構築

研究課題名（英文）Survey of pain patient at home, pain assessment of them, and establishment of pain care network

研究代表者

深井 喜代子 (FUKAI KIYIOKO)

岡山大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：70104809

研究成果の概要（和文）：在宅療養中の慢性痛患者の現状調査と、その系統的アセスメントの試行、ホームページや学術集会での交流集会を通じて疼痛ケアネットワーク構築を試みた。その結果、重度の痛みを長期間抱えて生活する非がん性の慢性疼痛患者が少なくないこと、看護職は疼痛ケアに苦慮していることが分かった。疼痛看護に関わる実践者と研究者が連携してネットワークを構築することで我が国の疼痛看護の推進が期待できる。

研究成果の概要（英文）：We surveyed on chronic pain home-care patients, assessed the pain of some consented patients, and begun to create pain care networks through homepage and inter-professions exchange at academic meetings. As a result, it is suggested that not a few severe pain patients live their lives for a long period in Japan, and that nurses have troubles caring such patients. Pain care network created by nurses and nursing scientist through cooperation with each other will promote pain management nursing in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2009年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：疼痛看護・非がん性慢性疼痛患者・痛みのアセスメント・痛みの多次元評価・疼痛ケアネットワーク

1. 研究開始当初の背景

2000年代初頭の我が国では、在宅で重度の痛みを苦しむ、特になん患者以外の在宅患者は、手厚いがん疼痛管理の外に置かれ疼痛管理は十分とはいえず、高価なオピオイド（保険適用外）の使用に踏み切れないケースもあった。

一方、世界的に見ても、中等度以上の痛みを体験している癌患者は過去 30 年間で減少しておらず、WHO 方式の癌疼痛の管理が必ずしも奏功していないという問題が起こっていた。米国の世界的疼痛看護学者 Miaskowski (2005) はその原因として、WHO のラダー方式は必ずしも万人に適用できないこと、断片的な観察では患者の痛みは看過されることを指摘した。そして、米国内に癌疼痛管理の新しいガイドラインを発表し (2005)、がん疼痛に限らない、広く痛みの臨床で共有できる行き届いた具体策を提案している。

このように、痛みの原因が何であろうと、患者にとって慢性的な強い痛みは生活活動や社会性を阻害し、自尊心を奪う最悪の症状である。疼痛管理の進んだ米国では慢性疼痛にも積極的にオピオイドが使用されている。しかし、我が国では、がん疼痛以外の疼痛患者に対する管理体制は全くといっていいほど整っていない。そのため、家庭医や保健師・看護師など在宅ケアに携わる専門職者は、こうした患者の疼痛管理に苦慮している。これには、保健・医療の専門職が痛みの系統的教育を受けていないこと、専門職間の連携不足、そして、Miaskowski が指摘するように実践の場のかき細かい観察と適切な疼痛評価が徹底していないこと、そして疼痛管理の医療体制の遅れ、それらのいずれもが原因しているといえよう。

こうした背景から、十分な疼痛管理を受けられないまま在宅で慢性疼痛に苦しむ患者の実態を知り、看護職を中心とした痛みのケアに携わる専門職が相互に連携する疼痛ケアネットワークを構築することは、我が国の疼痛看護の確立と進歩に不可欠かつ急務であるといえた。

2. 研究の目的

我が国の在宅で療養中の患者の中には、痛みを主訴としながら癌疼痛患者のような組織的な疼痛管理を受けられず、不必要な慢性痛に苦しむ患者が少なからず存在する。

そこで、本研究では、当初の目的を、(1)

我が国の在宅療養中の患者のうち、癌疼痛及び非癌疼痛のある患者の存在割合とその生活実態を明らかにすること、(2) そうした患者に起こっている現象を生理・心理・行動など多角的視点で観察・評価すること、さらに、(3) 在宅患者の疼痛管理を改善するために専門職者からなる疼痛ケアネットワークを構築すること、とした。

3. 研究の方法

当初の計画では、全国調査を実施する予定で、漸次本調査の準備を進めていたが、研究期間半ばの 2011 年 3 月に起きた東日本地区の甚大な災害（東日本大震災）を鑑み、一部計画を見直し、以下の方法で研究を遂行した。

(1) 在宅疼痛患者の実態調査の実施

無作為抽出した中国・四国地方の西日本訪問看護ステーションの責任者（看護職）を対象に、訪問在宅患者中の疼痛患者の割合と、一部患者の疼痛管理について調査する。

また、ハンセン病後遺障害としての末梢神経痛のある患者の痛みと疼痛管理の実態調査を、全国 13 施設を対象に実施する。

(2) 痛みの多次元的アセスメント

研究代表者の深井が岡山大学病院で実施している「ペインクリニックー痛みの相談室」に来院する慢性痛患者に対して、パイロットスタディとして、疼痛部位を中心としたフィジカルイグザミネーション、ペインビジョンによる痛み度の測定、5 種類のアセスメントツールによる疼痛評価、ペインヒストリーと現症に関する系統的かつ入念な問診を行う。

(3) ホームページ「疼痛ケアネットワーク」の設置と管理・運用

一般向（一部英語版も設置）、専門職向のページを設け、疼痛看護に関する種々の情報を提供する。

(4) 交流集会による研究者交流の推進

日本看護技術学会学術集会で毎年交流集会を開催して、看護学者と看護実践者に、申請者らの疼痛看護に関する教育・研究そして実践活動を紹介するとともに、疼痛看護の問題点と解決策について議論する場をもつ。

4. 研究成果

(1) 在宅疼痛患者の痛みと疼痛管理の現状

①在宅療養患者の痛み

訪問看護ステーション管理者を対象に、在宅疼痛患者の状況にかんする実態調査を

施した。調査対象は岡山県内の全施設と中国・四国地方全施設から無作為抽出した計239施設で、36施設から回答を得た。一施設平均の訪問患者数は45.4人で、そのうち痛みのある患者は9.6人であった。うち半数ががん疼痛であったが、腰痛、糖尿病性神経障害による痛み、頭痛、神経痛その他難病による痛みもみられた。57名の個別のデータのうち49名にVAS評価で2.5～6.9の痛みが常在していた。大半の患者に鎮痛薬の使用があったが、電法や芳香療法の積極的併用が見られた。これらの結果から、在宅療養中の患者の1割以上が常在する痛みで苦しむ、必ずしも適切な疼痛管理下に置かれていない状況が明らかになった。

②ハンセン病患者の痛み

我が国の国立ハンセン病療養所の全調査を実施した。全13施設92部署のうち24部署から回答があった。1部署当たりの看護職数は24名、患者数は28名であった。痛みのある患者数は平均7.6人で75%が手足の痛みを訴えていた(幻肢痛を含む)。半数の疼痛患者が常時VAS4-9の中等度以上の痛みを訴えているにも関わらず、NSAIDsを中心とした鎮痛効果の低い薬が投与されているに過ぎなかった。看護職による積極的な代替療法による鎮痛が得られたケースも少数例ではあったが存在した。こうした結果から、看護職が痛みのアセスメントを中心とした疼痛ケアの知識と技術を強化することにより、疼痛管理の困難な患者の痛みが進歩する可能性が示唆された。

(2) 痛みの多次元的アセスメント

個々の慢性疼痛患者の痛みの全身の系統的アセスメントについては、期間中に「痛みの相談室」を訪れた7例で実施したが、現段階ではパイロットスタディで、今後も続けていく。以下は暫定的な結果の概要である。

①7名全員がインターネットで検索するか、院内のポスターを見て「痛みの相談室」を知り、強い期待と動機で訪れた。②7名中6名の患者が10年以上の慢性痛に苦しむ、適切な疼痛管理を受けられないまま生活していた(薬物療法はほとんど無効)。③ペインビジョンで測定した痛み度(数十～数百)とアセスメントツールの評価は概ね一致しており、慢性痛に特徴的な行動評価尺度の高得点が見られた。④全員で痛みのために優れない表情で(フェイススケール評点が高い)、心気症傾向であった。⑤面接相談を繰り返し、痛みについての知識が増え、痛みの洞察ができるようになるにつれて、不安が軽減する傾向が見られた。⑥別途、科学研究費助成研究を得て開発中のビーズテープ式鎮痛材の使用で軽快するケースと、岡山大学病麻酔科等を紹介、連携を取りながら経過するケースが

あり、後者では相談は1年以上継続している。

(3) ホームページ「疼痛ケアネットワーク」開設と成果

2000年3月に、疼痛看護に特化したホームページ「疼痛ケアネットワーク」(<http://www.totucare.com/>)を開設し、一般向けと専門職向けの2つのサイトを置いた。一般向けサイトには「痛みの体験記」の閲覧や、poll形式の「痛みのアセスメントツール」による疼痛評価体験ページを届け(集計結果を定期的に更新)、痛みに関心のある人、現存する痛みで苦しむ人々への情報提供を行った。専門職向けサイトでは疼痛看護学者や在宅疼痛患者の痛みのケアに携わる専門職者(主として看護師・保健師)への専門知識(疼痛学講義や自著論文等の閲覧)や、学術情報(内外の痛み関連学会と、当年度の関連学術集会)を提供した。さらに一般向けサイトには英語版も設けた。

本ホームページの総閲覧数は平成25年3月末現在で30,000を超え、痛みのpoll投稿者355、疼痛ケアネットワークへの登録者は63名にそれぞれ達した。ホームページによる情報発信の取り組みは、一般者から当サイトへのメールによる質問や相談、学術集会での交流集会への参加を促す効果があった。本研究期間終了後もホームページの運用を継続して行う予定である。

(4) 交流集会による研究者交流の推進

2008年から毎年1回、計5回(研究期間以前を含めると8回)、日本看護技術学会学術集会(年次大会)時に、痛みに関心をもつ看護学研究者を対象とした交流集会を開催した(参加者数は30～50名程度)。集会ではホームページも紹介し、がん疼痛非がん疼痛を問わず、鎮痛薬による疼痛管理が困難な患者に対して看護職が果たすべき役割について議論する場となっている。平成24年度の当ケアネットワークの活動を25年度開催の交流集会(日本看護技術学会第12回学術集会、2013年9月、浜松)で紹介するほか将来にわたって、交流集会は継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

① 深井喜代子：痛みのアセスメント、EB NURSING、査読無し、8巻3号、pp278-286、2008

② 深井喜代子：高齢者の持続性疼痛管理ガイドラインー米国老年医学会指針より、EB NURSING、査読無し、8巻3号、pp326-333、2008

③深井喜代子、山下睦子：ハンセン病患者の痛み、EB NURSING、査読無し、8 巻 3 号、pp334-336、2008

〔学会発表〕（計 8 件）

一般演題

① Fuai, K., Hayase, R., Fujino, K., Hirokane, C., Matsuoka, M., Ninomiya, M., Sumida, R., Tsukamoto, H. & Uchida, M.: Survey of nurses in the national facilities on chronic residual neuropathic pain after leprosy in Japan. 16th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Developing International Networking for Nursing Research, Feb. 21, 2013, Bangkok, Thailand

会長講演、シンポジウム

①深井喜代子：キーセッションⅡ：疼痛緩和技術の開発研究－疼痛看護学の確立を目指して。日本看護技術学会第 10 回学術集会、日本赤十字看護大学、2011 年 10 月 29 日、東京

②深井喜代子：会長講演・ヒトの痛みを問い続けて。第 36 回日本看護研究学会学術集会、2010 年 8 月 21 日、岡山

交流集会

①深井喜代子：痛みへのケアの確立を目指して（8）－疼痛看護への Multidimensional Approach-日本看護技術学会第 11 回学術集会（福岡） 2012 年 09 月 16 日～2012 年 09 月 17 日

②深井喜代子：交流セッションⅠ：疼痛のケアの確立を目指して（7）－疼痛ケアネットワークを築く鍵。日本看護技術学会第 10 回学術集会、2011 年 10 月 29 日、東京

③深井喜代子、新見明子、大倉美穂、佐知亨：交流セッションⅤ 痛みへのケアの確立を目指して（6）－痛みへのアセスメント技術を再考する－患者はなぜ相談室を訪れるか、2010 年 10 月 23 日、名古屋

④深井喜代子、新見明子、掛田崇寛、大倉美穂、佐知亨：日本看護技術学会第 8 回学術集会、痛みへのケアの確立を目指して（5）－疼痛ケアネットワークで疼痛看護を推進する、2009 年 9 月 26 日、旭川

交流集会：

⑤深井喜代子、佐知亨、新見明子、掛田崇寛、大倉美穂：痛みへのケアの確立を目指して（4）－非がん疼痛に注目する、日本看護技術学会第 7 回学術集会、2008 年 9 月 20 日、青森

〔図書〕（計 1 件）

①深井喜代子、第 3 章 3. 6) 疼痛緩和の看護技術、看護の科学社、看護技術の探究－日本看護技術学会 10 周年記念（日本看護技術学会・監）、2011、pp143-150

〔その他〕

ホームページ

疼痛ケアネットワーク

<http://www.totucare.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深井 喜代子 (FUKAI KIYOKO)

岡山大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：70104809

(2) 研究分担者

兵藤 好美 (HYODO YOSHIMI)

岡山大学・大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：90151555

早瀬 良 (HAYASE RYO)

岡山大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：90571927

(3) 研究協力者

浅利 正二 (ASARI SHOJI)

倉敷リハビリテーション病院・院長

元・岡山大学・大学院保健学研究科・教授

大倉 美穂 (OHKURA MIHO)

元・岡山大学・大学院保健学研究科・助教

住吉 和子 (SUMIYOSHI KAZUKO)

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

山下 睦子 (YAMASHITA MUTSUKO)

岡山医療センター・がん専門看護師

山下 裕美 (YAMASHITA HIROMI)

長崎大学・歯学部・歯科医

森 貴美 (MORI KIMI)

岡山県保健所・保健師・精神保健福祉士

佐知 亨 (SACHI TORU)

中津数学塾・代表（日本看護技術学会会員）